
時計の針

春菜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時計の針

【Nコード】

N3437I

【作者名】

春菜

【あらすじ】

恋人との甘い時間を失った彼女の悲しい選択。それを取り巻く人々の思い。一度短編で公開したものを連載として再度公開しております。

時計の針：本編

甘いまどろみの中で、私は夜を見つめながら耳を澄ました。

家の中から音は聞こえない。

外に行く人の足音がときどき、響いてくる。

それが仕事から帰る女性だとわかるのは、低めのヒールの音と歩く速度から。

彼女の顔も名前も知らない。

毎日深夜1時を過ぎたころに帰るということしかわからない。

何故、深夜1時なのか。

彼が仕事を終えて家に帰り、私に電話をかけてくるのがいつもそのくらいの時間だからだ。

私は眠い目を軽く閉じ、それでも眠ることはせずに電話が鳴るのを待つ。

一日の中で、この時間が一番長く感じる。

彼は今、何をしているだろう？

少なくとも電話を片手に時計を見ながら今かけようか、あと5分待とうかなんて考える人じゃない。

コーヒーか、レモンを入れた炭酸水をお気に入りの大きなガラス製のグラスに注いで

部屋の真ん中にあるあの白いソファーに体を沈め、ボリウムを落としたテレビを眺めて、視界に入った時計をちらりと見て私を思い出す。

電話を手に、コールを1回。

携帯電話の画面に彼の名前が表示されて、またいつもの待ち受け画面に戻る。

不在着信が一件。

私はもう一度、家の中に耳を澄ませて、誰の気配もないことを確認

する。

不在着信に折り返し1コールして電話を切るとまたすぐに彼の名前が表示される。

今度は私がその電話を受けるまで続く。

「もしもし?」

私が小さな声でそう言うと、彼が同じ言葉を繰り返す。

「もしもし。」

目を閉じて私は彼の声に応える。

最初の2分はゆっくりと、何も会話のないまま過ぎていく。

電話越しに聞こえる声で、お互いの存在を確かめるように。話をするのは彼だ。

仕事の話、趣味の話、通勤中に会った何でもないような出来事。

私は相槌を打つ。

うん、とか、へえー、とか。ときどき静かに笑ったりして。

友達には反応が薄くて話しがないとよく言われるけど、彼はそうは思わないらしい。

だんだん声が嬉しそうに弾んでくる。

そして私の話を聞きたがる。

今日は何があつた?

前に話してたあのことはどうなった?

今度、どこかに行くとしたらどこがいい?

その質問に私は答える。

今日は映画を見た。

思ったようには上手くいかなかったけど、どうにか解決できたよ。

今度、前に友達が話してたあのお店に行ってみたいな。

彼がときどきグラスに口をつけて、何か飲んでいるのを感じる。

そろそろ最後の一口を飲んだんじゃないかな?

そう思った頃、初めて私から話を切り出す。

「もう眠いから寝るね。」

わざとらしくあくびをして聞かせると、彼が笑う。

「おやすみ。」

低い声がそう言うってから5秒の後の電子音。

通話終了。

彼はすぐに電話を切らない。

私に彼を引き止める時間をくれる。

「ねえ？」

それだけ言えば、彼はまた話をしてくれる。

優しく、子守唄を歌うように私が眠るまでそこにいてくれる。

その時間と優しさが好きだ。

家族と住んでいる私が、こんな時間に電話していることを知られて叱られることのないように

あまり声を出さなくていいように彼が話してくれる。

逆に会ったときには私が饒舌に話をし、彼は静かに聞いている。

たった1時間と30分。

それは彼の車で出かけて、一日を過ごすよりも甘い、大切な二人の時間。

一日はいつもと変わらない。だからこそ長く感じてしまう。

学校に行つて、興味もない授業をこなし、家に帰る。

母や父のお決まりになった押し問答をうんざりと宥めながら時計を見る。

もうすぐ一日が終わる。

またあの時間がくる。

はずだった。

深夜1時。鳴るはずの電話は黙ったまま。

胸がざわつく。

電話できない日はいつもメールを送ってくれていた。

今日は何もない。

何もないとわかっていながら何度も受信ボックスを開いてみる。

新着メールもない。

夜の電話では仕事で行く先が圏外だから、昼間はメールできないと言っていた。

まだそこにいるのかも知れない。

そんなことはありえないと頭の中でもう一人の自分が呟く。

それならどうして？

怖い。

嫌われてしまったんだろうか。

自分ばかりが喋らなければならぬ電話に嫌気がさしてしまったのだろうか。

他にあの時間を過ごしたい人ができてしまったの？

最悪とも呼べる答えはいくらでも湧いてくる。

仕事で疲れて今日は寝てしまっただけとか、電話が遅れているだけとか、理由は他にもあるのに、そんな理由は今は慰めにもならない。

不安が広がり、涙も出ない。

やがて眠りが私を闇へと突き落とした。

翌朝、画面には不在着信の文字もなく、新しく届いたメールもない。重い足を引かず学校へ向かった。

彼からの連絡がなくても、一日はいつもと同じように日常と化す。

長い日。

時間は少しも動く気配がない。

秒針のない時計をじっと見つめ、ひたすらに時の足音を待った。

思考の隅に疑いを抱いた。

時計の故障？

本当は時が止まってしまっているのかも。

でも私は確かに呼吸をしているし、つまらない授業は今も進んでる。

わざとゆっくり呼吸をしてみる。ゆっくり瞬きをしてみる。

一秒が早く過ぎることを祈りながら、吸って、吐いて、開いて、閉じて。

彼を思う以外に私にできることは、何もない。

やるべきことが見つからない。

だから、そうするのだ。

平静を保つために。

止まない胸騒ぎに心が押し潰されてしまわないように。

終業のチャイムによって学校という鎖から解放されると、私は脇目も振らずに家へと走った。

部屋に駆け込み、机の上で充電器に繋がれた携帯を取り上げる。

画面には、新着メールの文字。

彼からのメールだ。

息をすることを思い出したように大きく呼吸を一回。

さっきまで感じていた胸のざわつきが吐息と共にゆっくりと出て行くのを感じる。

電話してくれなかったことを何と言って咎めようか？

頭の中に浮かぶ彼の申し訳なさそうな顔に思わず微笑む。

メールにタイトルはなく、本文にはたったこれだけ。

『このメールを見たらすぐに連絡を下さい。』

消えたはずの炎がまた大きく身を揺らし、燃え始めた。

胸騒ぎが不安を煽り、荒くなった息が唇を乾かす。

着信履歴を埋める彼の電話番号。

震える指が通話ボタンを押すと、少し間があって呼び出し音が響いた。

乾燥した唇を舌先で舐めて潤す。

何度目かのコールの後、

「もしもし？」

低い男の声がした。

「あの……」

私の言葉を遮り、男は冷静に私の名前を確かめた。

そして、落ち着くようにと宥めたあと
言った。

彼が、死んだ、と。

胸は一瞬にして騒ぐのを止め、口を固く閉ざした。

目の前が暗くなった。世界が色を失った。

どこか遠いところから聞こえている男の声が、私に呼びかけていた。

「どう……いう……ことですか？」

信じられない。

信じたくもない。

彼が死ぬなんて。

「駐車場で車を降りてすぐ、暴走していた車が……」

あの優しい人が、私の一番大切な人が

さよならも言わずに、この世界からいなくなってしまう。

「……いや……やだあああ！」

電話を投げ捨て、髪を掻きむしり、息が続く限り私は叫んだ。

行かないで。

私を置いて消えてしまわないで。

二度と笑いかけてくれなくても、私の髪を撫でてくれなくてもいい

から、ここにいて。

私が生きるこの世界に。

自分の肩を抱き、頭を左右に振り続けた。

床に体を打ち付けても叫びは止まない。

力いっぱい握った腕には爪が食い込んで血が滲んでいた。

絶望という言葉がこんなにも似合う日は他にないだろう。

世界は終わった。

時計の針が動くのは、私のためじゃない。

声を聞きつけて駆け寄ってきた母はしつこく私に迫ってきた。

何があつたのか、と。

私は母の顔を見ずに答えた。

彼が死んだ。

自分とは全く関係のないことを伝えているみたいだった。

今、母の目の前に座っている私は私じゃない。

そうでなければ、死という言葉がこんなに軽くて味気ないのはおかしい。

まだ通話中と表示されている携帯を手に取り、耳に当てた。

彼の同僚だというその男は私をもう一度宥めたあと、彼の葬儀の場所と日時を伝えて電話を切った。

無機質な音が通話終了を告げる。

「彼に会いたい……」

母の方を振り向き、そう言うとき母は静かに首を横に振った。

「見ない方がいいと思うわ。つらいだけだもの……」

そう言い残して部屋から出て行った。

なぜ？どうしてなの？

私は彼に別れも言わせてもらえないの？

夜が空から光を奪う。暗闇が部屋を満たす。

立ち上がることもできずに床に手足を投げだした私の部屋に母が食事を持って入ってきた。

「明日は学校休みなさい。」

「どうして？」

「そんな状態で行けるわけじゃない。とにかく休みなさい。」
違う……。

「お母さんは私を心配してるんじゃないよね。」

「何を言ってるの？」

「お母さんは私を監禁しておきたいだけなのよ……」

不思議と笑いが込み上げてきた。

笑えるような気分じゃないはずなのに笑いたくなった。

その日、父が帰ってから母が話していた。

「だからあんな人と付き合うなって言ったのよ……年も離れてるし……」

父は何も言い返さなかった。

それはきつと父も母と同じことを思ってるからだ。

「もつと強く反対していればこんなことにはならなかったわ……」

深夜1時。

家中が寝静まった頃、いつもと変わらないあのヒールの音が聞こえてきた。

目を覚ましていても電話は鳴らない。

わかつているのに私は何かを待っていた。

あの低くて優しい声が電話の向こうから聞こえてくるんじゃないかって、どこかで期待しているみたい。

「ありえない……」

そう呟いた瞬間、現実が一気に襲いかかってきた。

息が苦しい。心が痛い。体中を不安が食い散らしていく。

眠ってしまったかった。

そして全てを忘れてしまえたら。

彼の死も、彼が恋人だったことも、出会ったことさえ忘れてしまいたい。そうすれば叶わぬことに期待を抱かなくて済む。

また声を聞きたいとか、彼の最期の姿を見たいという望みも持たなくていい。

目を閉じてても、眠りは悲しみと絶望から私を救ってはくれない。

眠りがどんなに力を尽くしても、意味がない。

彼のことを父と母にどれだけ訴えても意味がなかったように。

きつと母は私を一日中見張るだろう。

家から一步も出さずに今をやり過ごせば、私は彼の葬儀に行くことができない。

母の願いは叶えられる。そこには私の意志など存在しない。

親の保護下になければ何もできない年齢の私には自らの意思を通せ

るほどの力はない。
自由なんてものはずっと奪われ続けている。
それが当然だというように。

彼の死から一日が過ぎた。

朝、母が食事を私の部屋まで運んできた。

昨日、運ばれた食事には手を付けていなかった。

部屋の入口に置かれた白い皿の上に何が乗っているのかさえ、知らない。

彼を失った世界に存在するものに興味がもてない。

「食べなさい。」

そう言った母の言葉にも私は反応しなかった。

黙って頭の上まで布団を被ったまま。

母は小さな声で文句のようなことを言いながら部屋を出て行った。

ドアが閉まる音を聞いて布団から顔を出した。

時計の秒針が一定のリズムを刻む中、閉めたカーテンの僅かな隙間から太陽の光が筋になって差し込んでる。

太陽の下にいる誰かの声がする。

生活の音が聞こえる。

ただ一人しか存在しない私の一番大切な人がなくなったのに、世界は何も変わらない。

続いていく。これからもずっと。

だったら、私は？

私がいなくなっても世界は何事もなかったような顔をして続いているの？

それなら私はいなくなってもいい？

自由はない。唯一の望みも叶うことはない。

光が見えない。

もう生きることの意味を見出だすことができないこの世界から脱出

したい。

私は救いを求めていた。

長い間、この場所から

「助けて」と叫び続けていた。

彼はその声を聞いたんだ。

だから、私の傍にいてくれた。

心を寄り添わせて、私が一人にならないようにしてくれていた。

なのに、私を置いて行くのね。

ふと、静かな部屋に彼の言葉を聞いたような気がした。

「どこに行きたい？」

あなたの傍。

その手が導いてくれる場所に。

「おいで。」

カーテンを開けた。

空は青く晴れ渡り、窓を開けると爽やかな風が髪を揺らす。

何て澄んだ美しい日だろう。

姿の見えない彼がああ優しい声で私の名を呼ぶのが聞こえる。

私はその声に応えた。

「今、行くからね。」

窓の外、遙か遠くに見えるコンクリートの地面。

そこに吸い寄せられるように私は窓から体を放り出した。

遮るものは何もない。

心を縛っていたものを捨てて軽くなったこの体を包むのは空気だけ。

青くて明るい空が視界一面に広がってる。

時間が止まったみたいだ。

長くて苦しいだけの時間が私の頭上から姿を消した。

やがて頭から爪先まで走った衝撃。

その日、私の時が止まった。

時計の針はもう二度と動かない。

時計の針：母

まだ子供だと思っていた娘が、人を紹介すると言った翌日に男を連れて帰ってきた。

背の高い、物腰の柔らかい男。娘より随分年上で、娘より私の弟の方が年が近いくらい。

娘は言った。

「彼と付き合ってるの。」

本気なのかどうか、迷った。

何も言えなかった。言えないまま、男が帰るのを見送った。

娘は満足そうな顔をして呟いた。

「紹介できてよかった。」

その晴れやかな笑顔に私の心は曇った。

「認めたわけじゃないわよ。」

「え？」

「お母さんは、反対よ。年も離れ過ぎてるし……」

「でもいい人だったでしょう？」

「今はそう見えるだけよ。あなたは騙されてるわ。」

「……何でそう言えるのよ。何も知らないくせに！」

「親に向かってその口の利き方は何？！」

娘は一瞬何か言いかけて口を開いたけど、何も言わずに家の中に戻ってしまった。

わがままで、聞き分けの悪い娘。

昔はそんなことなかったのに。

小さい頃から歌うのが好きで、よく保育園や学校で歌っては先生に褒められていた。

それが余程嬉しかったらしい。

将来の夢はずっと変わらず「歌手になること」だった。

ある時、娘がオーディションを受けると言い出した。

テレビ番組の企画で子供をターゲットに歌のオーディションを行うらしい。

「出たいの！いいでしょう？」

「こんなことして、どうするつもり？」

「歌手になってテレビに出るのよ。」

世の中のことなんか何も知らない娘。

これは言うほど簡単なことでも、楽しいことでもない。

「歌手になったって一生それで生きていけるわけじゃないのよ？」

「でも！やってみたい……」

「ダメよ。行かせません。」

娘のためを思えば、そう言うのが当然だと思った。

でも親の心なんてやっぱりわかってもらえない。

「学校で音楽の先生に習ってきたのよ。」

そう言って娘は讃美歌を歌いだした。Amazing Grace.

「これをオーディションで歌えば合格は間違いなしだって言われたの。」

諦めてないと言わんばかりの眼差し。

どうして理解してくれないのか。こんなにもあなたのためを思っているのに。

「どうしてお母さんの言うことが聞けないの？もう私の前では歌わないで！いいわね。」

「お母さんは……私の歌が嫌いなの？」

夕食を作っていた私は何も言わずに手を動かし続けた。娘が泣いている気配を背中に感じながら。

それ以来、娘は家で歌わなくなった。歌手になりたいと言わなくなった。諦めたんだと胸を撫で下ろした。

あの男の話は娘から聞かされないまま、別れたんだと思っていた。許されない夢も許されない恋も諦めるしかないと割り切ったのだと思っていた。

もう寝たはずの娘の部屋の前を通りかかったとき、そうではなかったことを知った。

一人でいるはずなのに、話し声が聞こえてくる。

「何してるの？」

部屋のドアを開くと、ベッドの上に娘。手に携帯電話を持っている。

「勝手に入ってこないで！」

「何してるの？誰と電話してるの？」

「関係ないでしょ！出て行ってよ！」

娘の雰囲気からわかった。電話の相手は……あの男だ。

「まだあの男が自分のことを好きだなんて勘違いしてるのね？」

「勘違いじゃない！そんな言葉で彼を汚さないで！」

部屋を追い出されてからも私はドアの向こうから叫び続けた。

「あなたが騙されて傷つくところなんて見たくないのよ。ここを開けて！」

娘は返事をしなかった。鍵のないドアがひどく分厚く、重く感じられて開けなかった。

いつか、私が正しかったとわかる日が来る。それがあの子が大人になって、母親になったときでも遅くはない。

自分にそう言い聞かせたが、頭の隅で現実味のない話だと誰かが笑った気がした。

どうしてそんなことを思うのかしら。娘だっていつかは誰かと結婚して、母親になるのに。

私はあの男のことを気にしないように努めた。

騙されて傷ついて、それはきつとあの子のためになると考えることにした。

そして、あの日がやってきた。

夕飯の買い物から帰ってきた私を迎えたのは娘の部屋から聞こえる悲鳴だった。

強盗でも入ったのかと心臓が跳ね上がったが、途切れることのない叫び声がそうではないことを私に教えた。

鼓動を深呼吸で少し整えて、部屋のドアを開いた。

指を血で染めた娘が宙に視線を泳がせながら喘ぐように叫び声をあげている。

今まで見たこともないくらい取り乱した娘の姿にうろたえながら、傍に歩み寄った。

足下に携帯電話が落ちていた。

「どうしたの？何をしているの？」

娘の指を一本一本腕から剥がし、静かに床に座らせた。

瞳は正面に座った私の方を向いたけどその目に私は映っていなかった。

「何があつたの？」

なるべく落ち着いた声で尋ねると娘は乾いた唇を僅かに動かした。

「……彼が死んだ。」

裏切り、という言葉が咄嗟に脳裏を過つたものの、こんな結末は想定外だった。

子供を甘い言葉で弄び、最後には捨てる。そんな程度の裏切りだと思っていた。見返すことも、してほしくはないけれど復讐だつてできるような簡単なものだと。

でもそれ以上に意外だったのは恋人の死を聞かされた娘が涙の一つも流さずにいることだった。

無表情。そこに映る悲しみから目を逸らしたくて私は足下に落ちていた携帯電話に視線を落とした。

通話中表示された携帯電話の画面。この電話の向こうで娘が話すのを待っている誰かがいる。

「出なさい。」

携帯電話を血で汚れた手に持たせると、娘はぼんやりした顔のままそれを耳に当てた。

「はい……」

少し間があつてまた返事をして、しばらく黙つてまた返事をして……。そうして電話は切れたようだった。

娘が俯き、生気のない目で一点を見つめている間、私は役に立たない言葉を言っただけだった。

「だから別れなさいって言ったのに」とか、そんなことを。そして娘は言つた。

「彼に会いたい……」

初めて私を映した瞳に、首を横に振つた。

「見ない方がいいと思うわ。つらいだけだもの……」

今は頭が混乱しているだろう。一人にしてあげなきゃ。と、部屋から出た。

夕食は何か好きなものを作つてあげなきゃ。少しでも元気になって早く立ち直つてもらいたい。

1時間、2時間経つても娘が部屋から出てこない。夕食はとつくにできている。

部屋のドアの前に立つても声をかけられずに、部屋に持つて行こうと立ち上がった。

今は誰にも会いたくないのかもしれない。

ドアをノックした。返事はなかった。ゆっくりドアを開いた。娘は私が部屋を出て行ったときにいた場所でぐったりと寝ていた。

明かりもつけずに、涙も流さずに。

「明日は学校休みなさい。」

「どうして？」

薄い氷の上を滑るような細く弱い声で返事が聞こえた。

「そんな状態で行けるわけじゃないじゃない。とにかく休みなさい。」
空気がふふつと揺れた。床の上に寝ている娘が俄かに笑つたのだ。

よく耳を澄ますと娘は小さく呟いた。

「お母さんは私を心配してるんじゃないよね。」

「何を言ってるの？」

「お母さんは私を監禁しておきたいだけなのよ……」

それからクスクスと笑い出した。

私はシヨックでしばらく呆然としていた。笑いの意味も、言葉の意味もわからなかった。

娘があんなことを言うなんて。

大切にしているからこそ、あんな男のことは忘れてほしい。

死んだなら尚更、死に顔を見に行つて傷を深めることはない。

そう思つたから行くなと言つたのに、それは間違いだったの？

今日は誰にも会いたくないだろうから、死んだあの男のことしか考えられないだろうと思つたから学校を休んでと言つたのに。

わからない。娘の気持ちが。

夜遅くに帰つて来た夫に娘のことを説明すると夫は冷たく言つた。

「どうしてうちの娘が……お前は止めなかったのか？」

「だから……あんな人と付き合うなって言つたのよ。年も離れてるし……」

頭痛がしてきた。どこから違う自分が呼びかけてる。

そんな考えは正しくない。改める、と。

「もっと強く反対していればこんなことにはならなかったわ……」

翌朝。一口どころか、私が部屋に運んだ状態のまま放置されていた食事。

ベッドの上で布団を被つたまま、動かなかった娘。

あの男が娘を変えてしまった……。

あの男がいたから、娘は休みの日に私と外出するのを嫌がるようになり、一人で外に出て行くようになった。

でも、あの男と付き合い始めてからは私に黙つて学校を休まなくなつたし、笑うことも多くなつた。

顔色がよくなったことにも気付いていた。

本当は……恨み言の一つくらい言いに行かなければいけないわね。

どうして娘を置いて死んでしまったの、そんな風に娘を悲しませてどういふつもりなの、と。

そしてありがとうの一言くらい言つてやらなくちゃ。

私はゆっくりと立ち上がり、ずっと着ていなかった礼服を出した。娘の礼服は長いこと買っていないからサイズが合わないけど、学校の制服がある。

服を着替えてタクシーを呼び、一度深呼吸をしてから娘の部屋をノックする。

返事がないのはわかっているので返事を待たずに、ドアを開けた。風がふわりと礼服のスカートの裾を揺らした。

先程とは違う明るい部屋。

光が入っている方向には開かれた窓があり、カーテンがひらひらと明かりを揺らした。

ベッドにあるはずの娘の姿がない。

嫌な予感がして窓に駆け寄り、外を見ると地面の上で娘が寝ていた。

辺りに血飛沫を撒き散らし、服を血で染めて。

気付くと私は喘ぐように息をしながら娘の体を抱き起こしていた。通りすがりの誰かに

「救急車を呼びましたから。」

そう声をかけられ、私は泣きながら頷いた。でもわかっていた。

娘がもう死んでいること、今更どんな手を尽くしたところで二度と戻ってきてくれないことも。

それから数日は感覚も記憶もなく過ぎ去った。

頭に残っているのは、病院の白いベッドに娘が寝ていたところ。

仕事から帰った夫と大声で怒鳴り合ったこと。

葬儀に娘のクラスメイトが数人、出席してくれたこと。

やっと喪服から着替えて、毎朝娘の写真を見るつらさにも涙を堪えられるようになった頃。

娘が死んでから初めて部屋に入った。

風を入れるために夫が閉めたであろう窓を開け放つ。風が半開きの

カーテンを膨らませた。

綺麗に片付いた机の端でカサカサと音がする。

引き出しから紙がはみ出して、風に揺れていた。

「何……？」

あの日は気付かなかった。娘がこれを見てと言っているみたいだ。

吸い寄せられるように傍に行った。

一番大きな引き出しを開いて、そこにあったのはたくさんの楽譜だった。

歌が大好きだった娘が先生や友達に楽譜を貰って密かに勉強していたんだろう。

いつか大きな舞台で誰にも邪魔されず、思いっきり歌うために。

小さく書き込まれた文字を見つめていると、その下にノートが入っていることに気付いた。

開いてみると、中には娘が苦しんでいたことがわかる言葉が書き連ねられていた。

歌詞という形で私への不満や、あの男への思いが綴られている。

最後のページまで捲ると、そこに書かれていた歌詞は書きかけのまま終わっていた。

呪縛はもう終わり

私は自由になろう

飛ぶ鳥たちと同じ

空高く舞い上がる

そしてさようなら

「呪縛……」

私のことだ。娘から自由を奪った。

歌くらい許してやればよかった。歌手を目指してもいいと言えなかった。

成功や挫折だっていつかは経験するのだったら、それがあの時でも

よかったのだから。

あの男のことも最初から娘を信じずに否定した。歌と同じように恋人まで奪おうとした。

全てを縛りつけようとした。

だからあの子は空を飛んだのね。鳥みたいになんて自由になんてたくて。

だから終わったのね。あの子の人生は。

書きかけのまま終わらなければならなかった、この歌詞のように…

…

時計の針：名もなき友

彼女がどんな人だったのか、私はよく知らない。
いつも笑ってた。

いつも人が集まってる輪の中にいた。

週に何度か、具合が悪いからと言って保健室で寝るか、早退していた。

ときどき一人になると空を見上げて歌ってた。

小さな声なのに、心の底から叫んでるみたいだった。

仲がよかったわけじゃない。

でも嫌われてるわけでもない。

微妙な距離。集団生活の中ではよくある距離。

それが私と彼女の関係。

あるとき、彼女に話しかけてみたことがある。

「最近、彼氏できたの？」

「ええ？どうしてわかったの？」

ただ世間話を始めるきっかけにすぎないその台詞に彼女は過剰なほどの反応を示した。

一瞬で耳を赤く染めて、声を嬉しそうに弾ませて、正直に。

「……何か、雰囲気変わったよね。」

私はその話の続きを聞くために愛想よくそんな言葉を投げかける。

興味はないけど最近付き合い始めたばかりの彼氏の話なら、女の子は誰でもいいから聞いてほしいだろうから。

でも彼女は違った。

「そうかな？でも内緒にしたいの。だから、誰にも言わないで。」

そう言っただけで彼女は唇に人差し指を当ててしいーっと音を立てた。

そして結局、何も話してはくれなかった。

どんな人なんだろう？

何で秘密にしておく必要があるのかな。

あ、もしかして同じ学校の……まさかとは思うけどクラスの男子なのかな？

聞きたいことが膨らんでいく。

知らない男の話で勝手に盛り上がられるとうんざりするくせに、何も話してもらえないと質問責めにしたくなる。

わがままもいいとこだと自分でも思う。

「ねえ？誰なの？私の知ってる人？」

彼女は私の質問に優しく笑って

「残念でした。知らない人だよ。」

と言った。

本当？と聞く前に休み時間が終わって、話はそれまでになった。

ねえねえ、さっきの話なんだけど……なんてまた話しかけられるほど私たちの関係は親しくない。

それから彼女は相変わrazるの様子で笑っていたし、他愛ない恋の話にも素知らぬ顔で加わっていた。

彼氏がいることなんて微塵も見せないで。

でも授業中にときどき、とても深刻な顔で黒板を睨みつけているのを見かけた。

何か悩みごとでもあるのかな。

と、友達面して勝手に心配していると、意外とあっさり答えが出た。頬杖について、真剣な顔をしていた彼女の瞼がゆっくりと閉じていく。

そして、頭がかくんと掌の上から滑り落ちた。

ただ眠いだけだったらしい。

せつかく心配してあげたのに損した。

などと、また勝手なことを思った自分に笑いが漏れた。

彼女は一度だって心配させるような様子を見せたことはない。

不思議に思わせたのはあるときだけだ。

親のことで、みんなが文句を言い合ったとき。

みんなは言われたことや、勝手に部屋を掃除されたとか、携帯を取り上げられたことについて文句を言っていた。

先生への不満や、クラスの誰かを槍玉に挙げるのと同じ。

誰も大して本気じゃない。

だけど、彼女だけは違った。

「親なんか、子供を思い通りに動かすことしか考えてないんだよ。きっと子供が一人の人間だなんて考えたこともないんじゃない？」

今まで彼女の口からは聞いたこともないくらい冷たいその声の響きに、私と他の何人かは言葉を失った。

話に熱中しすぎてそれに気付かなかった数人が大きく頷きながら同意すると、彼女はまたいつもの笑顔に戻って

「でも今更って感じだし、適当にあしらうしかないよね？」

そう言いながら微笑んだ。

笑顔がちよつと悲しそうというか、つらいのを隠すために笑っているように見えるのは私の思い込み？

それとも今初めて気付いただけでいつも無理して笑っているんだろうか。

いつしか私は彼女のことばかりを考えていた。

本当はずっと彼女と仲良くなりたかったんだろう。

特別な友達になって、二人だけの打ち明け話をして、二人で笑い合ったり、泣いたりしたかったんだ。

もっとたくさん聞けばよかったね、あなたの気持ち。

どうしてあんな叫ぶように歌うのか、その笑顔の下に何を隠しているのか。

遠慮しないで聞いていればよかったと思いつ返し度に後悔してる。

あの日のことも、そう。

彼女はあの日、いつもより遅れて登校してきた。

生気のない笑顔。

上辺だけ心配して声をかけてくるクラスメイトの中で、彼女はひた

すら「大丈夫」を繰り返していた。

寝不足なだけだから、具合が悪いわけじゃないから、大丈夫だと。確かに目の下のクマがひどくて、彼女の笑顔をげっそりと暗く見せていた。

表情が暗く見えたのは決してクマのせいだけじゃないと思った。それに寝不足だという割には授業中、いつもの眠そうな仕草をしない。

その代わり、ぼんやりと焦点の定まらない目で時計を眺めていた。ノートも書かず、休み時間は誰の話にも加わらず、時計をじっと見ていた。

時計の針が進むのを確かめているみたいに目線が動かなかった。授業が終わると彼女は黙って教室を後にした。

何かから逃げていくような後ろ姿に不安を感じながら私はその背中を見つめた。

また明日ね。

祈るような気持ちで呟いた。

届かない祈りだとは、そのときはまだ知らずにいた。

ただど追いかけてでも言えばよかった。

「また明日、会おうね。」

それだけで何かが変わったとは思えないけど、もしかしたら悲劇の結末を少しでも変えることができたかもしれない。

例えばそれが彼女の死をたった一日引き延ばせるだけだったとしても。

私にだって何かできたはずだ。

彼女の最期に一つくらいの何かを。

ねえ？そちらの世界はどうですか？

今も歌ってる？

あなたが苦しんでばかりいたこの世界よりそちらの世界が少しでも楽しいといいな。

涙を殺して苦しそうに笑っていないことを心から祈っています。
勇気がないあまり、あなたの友人になり損ねたクラスメイトAより。
愛をこめて。

時計の針：彼

初めて会ったとき、彼女はまだ子供だった。

少なくとも僕はそう思い込んでいて、その悩みや家に帰りたくないと言っ言葉を反抗期だからと軽く受け止めていた。

ありきたりな台詞で彼女を宥めて、車で家の近くまで送る。

「ありがとう。」

その言葉とは裏腹に恨むような目が僕を睨みつける。

そんなに睨むなよ。

いつか親に感謝するときに来るからさ。

心の中でそんな偉そうなことを言って、笑ってた。

なんて軽薄で馬鹿な男だったんだろう！

今、彼女の前にそんな奴が現れたら殴り飛ばしてやるのに。

異変に気付いたのは……嫌でも気付かされたのだけれど、それから数ヶ月後のことだった。

その日も彼女は学校を早退して来ていて、いつものように暗い顔で家に帰りたくないと話していた。

母親と性格が合わないということも言っていた。

話の途中で突然立ち上がった彼女が一番近くのゴミ箱に頭を突っ込んだ。

いきなりおかしいな行動をする奴だと首を傾げていると、彼女はゆっくり顔を上げた。

唇が赤い。顔は蒼白で、目も少し虚ろだ。ゴミ箱の中はまさに血の海だった。

これには驚き、絶句した。

覚えがある。僕が今の仕事を始めてしばらくした頃のことだ。

胃が痛い、目眩がする、そして波のように襲い掛かる吐き気。

早く仕事を覚えなければならぬプレッシャーと、やっと就職できた会社への気持ちから仕事を休むことができず、病院にも行けない

でいた。

吐き気がして会社のトイレに駆け込んだ。

便器に頭を突っ込み、喉の奥から這い出てくるものを吐き出した。

真っ白だったはずの視界が一気に赤く染まり、口の中は鉄の錆みたような味がした。

ストレス性の胃炎。

医者からそういう説明を受けたとき、胃に穴を開けるのは意外と簡単だったんだと頭の片隅が呟いた。

気付くと僕は彼女を両腕に抱え、車に向かって歩いていった。

目が虚ろで、ぐったりしている彼女の体は軽くて細かった。まだ子供だ。だけど、子供だって大人と同じように悩んだり、追い詰められたりするんだ。

何故それを侮ったりしたんだろう？

こんな愚かな大人がいるから子供がこんな痛みに苦しまなければならない。

そんなこともわからないのか、僕は！

「どこ、行くの？」

掠れた声で彼女が聞いた。

僕は涙が出そうなのを隠し、鼻からゆっくり息を吸い込んだ。

「病院だ。医者に診てもらえよ。」

そう言った瞬間、彼女が暴れ出した。

「嫌！病院なんて行きたくない！」

軽いとはいえ、暴れられては落とさずに抱える自信がない。

ゆっくりと地面に足を着けさせて下ろした。

「何で行きたくないんだ？放っておいて治るものじゃないぞ。」

逃げようとする彼女の肩をがっちり掴んで、僕は聞いた。

彼女を知りたい。今まで真面目に聞いていなかった話の本当の意味を聞かせてほしい。もっと本心に近いところで。

こんな気持ち、初めてだ。

彼女が僕を振り返り、試すような眼差しで僕の目を見つめた。その

目を見つめ返した。

瞬きもしないで、僕という人間を信じてくれることを祈りながら。

「意味……ないから……」

小さな声でそう言ったのが聞こえた。

「どうということ？」

僕が聞き返す。

「医者とは、子供より親の言葉を信じる。親が自分の子供は大袈裟に騒いでいるだけだと言えば、検査もせずに効かない薬を処方して私を家に帰すの。」

「でも、そのままじゃ……」

「薬なんかより効くものがあるから私は大丈夫。」

彼女は笑った。僕に向けてくれた初めての笑顔だった。

でも無理してるのがよくわかる。何て言ったらいいのかわからず、僕は首をひねった。

そして少し先に停めてある車を指差した。

「どこか行きたいところはないか？」

彼女の目が輝いた。

「空が近くて広いところ！知ってる？」

「ああ……一箇所だけ。」

その一箇所というのは山の展望台で、実はあんまりいい思い出がない。

昔、付き合ってた女と夜景を見に行ったんだけど、周りはカップルだらけ。

しかも、どいつもこいつも盛ってやがるから僕も調子に乗ってキスしようとしたらビンタを食らわされた。

その後、気まずい空気に耐え切れなくなり帰ろうとエンジンをかけたら、隣の空きスペースに停めようとバックしてきた車にぶつかった。

彼女は更に不機嫌を増し、保険の話やら何やらの話をして疲れきつ

た僕に帰り際、別れ話をして車を降りて行つた。

疲れ過ぎて止める気力も、戻ってくれと言う気も起きなくて今に至る。

僕はあの女と別れてから、ずっと恋人がいないのだ。道すがら、そんな話をしていた。

彼女は興味なさそうに相槌を打ち、外を眺めていた。

「着いたよ。」

展望駐車場に車を停めて外に出ると、彼女は足早に展望台に向かった。

僕の車の他は一台もない。今、ここには二人だけだ。

展望台の階段を上がり切ると、彼女はそこにいた。

青と白の空を見上げ、何かを求めるようにその手を伸ばした。

「Amazing Grace how sweet the sound…」

絶るような歌声。

空に見捨てられた天使がまた空へ飛ばたきたいと叫んでいるようだ。そこに、翼はもう無いというのに。

やがて曲は明るく楽しいものになり、最近流行っているようなポップな曲を歌い出した。

僕は古ぼけたベンチに腰かけてずっとその後ろ姿を眺めていた。

声をかけることも、隣にいることもできなかった。相応しくないよ。僕なんか。

一時間ほどして彼女のワンマンライブは終わり、こちらを振り返った彼女は言った。

「ありがとう！」

いつものお礼とは違う。すっきりした笑顔を見せた彼女に胸がときめいた。

「どういたしまして。」

そう言ったものの、口の中がカラカラに渴いていた。相手は子供だ。

冷静になれよ、自分。

と、思ったときにはもう遅かった。

「何かお礼しなくちゃ！」

そう言いながら近寄ってきた彼女に僕はこう言った。

「お礼なんかいいよ。僕と、付き合ってくれたら……恋人になつてくれたら、それで。」

何を言っただろう！自分で自分の台詞に驚き、開いた口が塞がらなかった。

しかも、もつと驚いたことに彼女は真面目な顔をして

「いいよ。そんなことでいいのなら。」

そう言った。

顔を真っ赤にしている彼女に駆け寄り、抱きしめる。

大切にするから。君の心を。

自由にしてあげたい。その苦しみから。

僕が出せる全ての力で、君を救い出すよ。

毎日、電話した。

仕事が終わって、なるべく早く家に帰り、風呂から上がって電話を手ソファに座る。

もう寝ているかも、という不安と、電話を待っているだろうな、という信頼が愛しくてたまらない。

ゆっくりと彼女のナンバーを出す。

通話ボタンを押して、1コールして、少し待つ。

彼女から折り返し1コール。

二人で決めた、起きてるよ、と、電話できるよ、のサイン。

また電話をかけ直すと彼女の静かな声が仕事で疲れた僕の耳に優しく響く。

もつと声が聞きたくて、僕は質問する。学校の話や、家族との話、行きたい場所なんかを。

休みの日には彼女が行きたい場所に連れて行く。

空が見える場所。広くて誰もいないような場所。

そして僕はいつも目を閉じて彼女が歌うのを聞いた。

涙を流せなくなった彼女が、誰にも本音を言うことができない彼女が、その言葉の代わりに吐き出す歌。

優しく美しい声で大空に向かつて。

そのとき、彼女を縛るものは何もない。

母親の束縛も、理解を得られないばかりに傷つけられる恐怖もない。僕の気持ちさえ、彼女を縛れない。

そして彼女は笑う。屈託のない子供らしい笑顔で振り返り、僕の隣に座る。

彼女に一時の自由を与える代償としてこの笑顔に縛られてるのは僕。それも悪くない。

むしろ喜んで受け入れよう。

彼女の肩を抱く。髪を撫でると子猫のように頬を擦りよせてくる。

今、僕は幸せだ。彼女も同じように幸せを感じてくれているだろうか？

「私、夜に電話してる 때가 一番好き。」

「どうして？」

「心が近くに感じるから。」

「へえ……僕は歌ってるのを聞いている方が好きだな。」

「何で？」

あの日、僕を一目惚れさせた君の歌声が好きだから。とは、言えなかった。

意気地無しの僕に「何で？何で？」と連呼しながら擦り寄ってくる彼女。

ニヤニヤ笑いを浮かべているところを見ると、多分お見通しなんだろう。

「いいだろ、別に。聞けるのが嬉しいんだよ。」

恥ずかしくなつて視線を逸らすと、彼女は

「ちえっ」

と、わざとらしい舌打ちをして笑った。

君が好きだ。

電話の向こうで静かに話す声も、笑った顔も、自分を解き放つ歌も好きだ。

でも、いや、だからこそあんなに苦しんでいる君は見たくない。

自由になってほしいんだ。

「また、君のお母さんに会いに行きたいな。」

そう言った瞬間、彼女の体が強張ったのを感じた。

彼女の母親とは前に一度、会ったことがある。

なかなか優しいそんな母親で、とても彼女を苦しめる原因になりそうな気がしなかった。

上辺だけ取り繕うのが得意な人だから。そう彼女は言う。だから僕はそれを信じることにした。

一度、彼女と電話で話しているときに母親に見つかったことがある。そのときはすぐに電話が切れてしまったが、しばらくして彼女から短いメールが届いた。

『ごめん。』

何を謝られたのか、わからなかった。

翌日、彼女が僕の目の前に現れた。虚ろな目は僕に向けられているが、僕を見てはいなかった。

「お母さんが、あなたが私を好きなのは、勘違いだって……」

そのまま消えてしまいそうだった。今掴まなければ幽霊のように霞になって、もう二度と現れないような気がした。

「勘違いなんかじゃない。僕がお母さんと話すよ。大丈夫。」

腕の中で彼女が震えていた。全身が怯えと悲しみに震えていた。

そうして僕は母親と直に話すことができたのだが、結局あまり効果はなかったようだ。

その日から、僕たちは秘密のサインを決めて電話をすることにしたのだ。

「ホントに圏外だ……」

携帯電話の電波はピタリとも動かず、ずっと同じ文字を表示させている。

こんなことなら朝、少しでも多くメールしてくればよかった。

山奥で、海沿いで、道もほとんど整備されていないようなところだと聞いていたから予想はしていたけれど、どこかでちょっとでも反応するんじゃないかと淡い期待をしていたのだ。

早く仕事を終わらせてなるべく早く電波の入るところへ戻るしかない。

そうは思っただけでも、なかなか簡単なことではなかった。

「もうすぐ1時だな……」

時計は深夜の0時54分を示している。

いつもならシャワーを浴びて、ソファでくつろぎながら、彼女に電話をしようと電話を片手にするくらいの時間なのに……。

ようやく仕事を終わらせた僕は車を走らせ、帰路についた。

早く電波の入る場所に行つて、時間的に電話はダメだとしてもメールくらいは送りたい。

「夜までには帰る」と言つたのに連絡がなくて彼女は不安に思っているだろうから。

しかし、慣れない場所での仕事に緊張していたからか、睡魔が容赦なく襲ってくる。

このまま運転するのは危険だと思つた僕は閉店した小さなスーパーの駐車場の片隅に車を止め、外の空気を吸いに車を降りた。

携帯電話はもう通じるようになっていた。

意気揚々とメール画面を開き、彼女のメールアドレスを入力した。次の瞬間、僕の体は宙を舞った。

ヘッドライトの壊れた車がスピードを落とさず、道路から駐車場へ入ろうとして僕を撥ねたのだ。

そのまま勢いよく店へ突っ込んで行くのを地面に伏したまま見ていた。

痛みはない。それどころか何の感覚もなかった。

携帯電話がカラカラと地面を転がっていった。

彼女の名前を呼びたくても、口から出るのは血ばかりだった。

僕は君を怯えさせていた恐怖から守りたかった。痛みから、救いたかった。

でも結局、僕の存在も君を苦しめることになってしまっていたんじゃないだろうか。

僕を失ったら、君は泣くかな。

君は心の中でしか泣けないから、僕がいないと誰も君の涙を拭いてあげられない。

だけど、もし僕がいなくなつて君が涙を流せたら……きっとその涙を拭いてくれる誰かと幸せになれるんだろう。

君の幸せを僕が作るんだ。

そう考えたら、このまま死ぬのも悪い気はしない。

でも、一つだけ言いたかった。

この世界の誰よりも君を愛してる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3437i/>

時計の針

2011年9月20日01時17分発行